

vol.54 2026



特集 SPECIAL

国立病院総合医学会セッション “若手医師フォーラム”



NHO TALK SESSION

特集 スペシャル座談会企画
NHO女性医師の本音座談会



SPECIAL 2

良医研修 in 仙台医療センター
令和7年度 良質な医師を育てる研修
脳卒中関連疾患診療能力パワーアップセミナー



HOSPITAL

病院クローズアップ

国立病院機構 東埼玉病院



PROGRAM

初期研修プログラムの紹介

国立病院機構 岡山医療センター

特集 国立病院総合医学会セッション “若手医師フォーラム”

口演発表「症例報告部門」最優秀賞 × Dr. Ryu Nakarai

Restless Legs Syndrome Induced by Brexpiprazole: A Case Report

下総精神医療センター 精神科／専攻医 半井 龍 [指導医] 精神科医長 小泉 輝樹



精神科から世界初症例を英語で発信 NHOならではの貴重な機会

—— 応募のきっかけ

指導医の小泉先生から「国立病院機構の学会で、英語によるセッションの機会があるよ」と勧めていただいたことが応募のきっかけです。以前から若手医師フォーラムに参加した先生方に「とても良い経験になる」と伺っており、専攻医として英語で発表できる機会は貴重だと感じました。精神科医としての学びを英語でアウトプットすることで、自分自身の成長にもつながると思い、参加を決意しました。

—— テーマについて

発表テーマは、抗精神病薬による「足のムズムズ感」に関する症例報告です。足のムズムズ感、患者さんの主観的

なつらさが強く、ときに自殺企図につながることもある重要な症状です。一方で、アカシジアやむずむず脚症候群(Restless Legs Syndrome)など、似たような症状を示す疾患が複数あり、それぞれで治療方針が異なるため、適切な鑑別が欠かせません。

今回報告したのは、ブレクスピプラゾール誘発性のむずむず脚症候群と考えられる症例で、世界初の報告と考えられる点も、このテーマを選んだ大きな理由です。抗精神病薬だけでなく、胃薬として使われるスルピリドなど、日常的に処方される薬でも同様の副作用が起こりうるため、精神科以外の先生方にも知っていただきたい内容だと思いました。

—— 準備で苦労したこと

「世界初」とうたう以上、本当に類似報告がないかを徹底的に確認する必要がありました。各種データベースや文献を検索し、受容体親和性などの薬理学的な背景も含めて地道に調べていく作業は時間もかかり、もっとも大変だった

部分です。

また、聴衆には精神科以外の先生方やコメディカルの方々もいらっしゃるため、専門用語をどこまで使うか、どこからはかみ砕いて説明すべきか、そのバランスにも悩みました。自覚的なムズムズ感と他者から見える落ち着きのなさの違いなど、微妙なニュアンスを英語でどう表現するかも、ネイティブでない自分にとっては大きな課題でした。

—— 発表や質疑応答を経験して

英語での口演はとても緊張しましたが、本番は大きなトラブルもなく、練習してきたとおりに発表することができたと思います。7分という限られた時間のなかで、症例の背景とメッセージとして一番伝えたいポイントをコンパクトにまとめる難しさも実感しました。

質疑応答では、英語の聞き取りに苦労した場面もあり、「あとから考えれば、こう答えたかった」という反省点も多く残りました。一方で、自分の英語力やプレゼンテーションの課題がはっきり見えたことは、大きな収穫だったと感じています。

—— 他の発表者から学んだこと

他の先生方の英語力の高さや、スライドの見せ方の工夫にはとても刺激を受けました。循環器科の実際の手技やダイナミックな画像を用いた発表は、精神科とはまた違った迫力があり、「自分ももっと伝え方を工夫したい」と素直に思いました。今回学んだことを、今後の学会発表でもしっかり活かしていきたいです。

—— 医師として大切にしていること

若い頃は、自分の成長やキャリアアップを優先して考えることが多かったのですが、臨床経験を重ねるなかで、「人のためになることが、結果的に一番自分のためになる」という感覚が強くなっ



PROFILE

出身地：東京都
出身大学：旭川医科大学(2021年卒)
宝物：周りの大切な人たち
座右の銘：淡々と一日一歩進む



てきました。患者さんやご家族、コメディカルの方々のために力を尽くすことが、自分自身のやりがいにもつながっていると感じています。

とはいえ、当直明けなどで自分に余裕がないときは、あとから振り返って「もっと寄り添えたのではないかと反省することもあります。そんなときこそ初心を思い出し、常に相手の立場に立って考えられる医師でありたいと思っています。

—— 将来の夢や目標について

これからも精神科臨床を軸にしつつ、内科や救急の知識も含めて、より包括的な視点から患者さんを診られる精神科医を目指したいです。また、今回のような症例報告だけでなく、研究として精神疾患や薬物療法のメカニズムを掘り下げていくことにも興味があります。臨床と研究の両方に取り組みながら、自分なりの形で精神医学の発展に貢献していけたらと思っています。

—— アドバイスとメッセージ

若手医師フォーラムの英語セッションは、国内にいながら英語で発表・質疑応答まで経験できる、NHOならではの貴重な場だと感じました。英語での発表に不安を感じる方も多いと思いますが、その分だけ得られる学びや自信も大きいはずです。

少しでも興味がある方は、完璧を目指しすぎず、ぜひ一歩を踏み出してみてください。準備は大変ですが、終わったときには必ず「挑戦して良かった」と思える経験になると思います。



“若手医師フォーラム”とは、NHOの若手医師を対象に、各自が取り組んできた症例や研究について、NHO等の多職種が一堂に会する国立病院総合医学会にて英語発表(質疑応答も英語)で行われるセッションです。最優秀賞の先生には副賞として国際学会への参加費用が補助されることとなっています。2025年11月7日(金)・8日(土)、金沢で開催された第79回国立病院総合医学会(テーマ:輪・環、そして和 —未来への「わ」の創成—)における、“若手医師フォーラム”の口演発表にて、最優秀賞に輝いた2人の先生に話を伺いました。



口演発表「臨床研究部門」最優秀賞 × Dr. Haruki Abe

HeadSmart guideline and diagnostic delays in pediatric brain tumors: a retrospective review of 14 cases

四国こどもとおとなの医療センター 小児科 専攻医 阿部 春季 [指導医] 小児血液・腫瘍内科医長 今井 剛



小児脳腫瘍のサインを見逃さないために HeadSmartを通じて地域と歩む



—— 応募のきっかけ

もともと「学会で何か発表しよう」という話があり、その中で指導医の今井先生から「せっかく発表するなら、若手医師フォーラムで英語発表に挑戦してみては」と背中を押していただいたことが応募のきっかけでした。英語で人前に立って話す機会は、なかなか得られません。正直、不安もありましたが、ここで一歩踏み出したほうが、きっと今後の自分のためになると思い、挑戦を決めました。

—— テーマについて

今回のテーマは、小児脳腫瘍の早期

診断に向けた取り組みとして、イギリスで始まった「HeadSmartキャンペーン」を当院でどのように活用してきたかをまとめた内容です。HeadSmartは、小児脳腫瘍の症状を、医療者だけでなく保護者にも分かりやすく示したガイドラインで、「どの症状が、どのくらいの期間続いたら受診を考えるべきか」という目安を示してくれます。

四国こどもとおとなの医療センターでは、今井先生の赴任以降、若手医師を中心にHeadSmartの考え方を共有し、院内の診療に取り入れてきました。また、地域の開業医の先生方や看護師、放射線技師の方々にもレクチャーを行い、「脳腫瘍かもしれない」という視点を日常診療の中で持ってもらえるよう働きかけてきました。その数年間の取り組みを振り返り、「早期診断にどう結びつくるのか」を整理したのが今回の発表です。

—— 準備で苦労したこと

小児がん領域は、どうしても症例数

が少ない分野です。限られた症例の中で、どこまで「数字」として意味のあることが言えるのか、どのような切り口なら学術的にも伝わるのかについては、何度もディスカッションを重ねました。

また、日本語で考えた内容をそのまま英訳すると、どうしても文が長く、だらだらした印象になってしまいます。英語プレゼンらしく、短く・端的に・スライド1枚あたりのメッセージを絞ることが難しく、原稿を何度も削っては書き直す作業を繰り返しました。

—— 発表や質疑応答を経験して

本番前は、英語そのものよりも「ちゃんと場を回せるか」のほうに心配でした。実際、冒頭でPCの操作やマイク、原稿の置き場などに少し戸惑い、余計に緊張してしまったのは反省点です。一方で、ゆっくり話すこと、盛り込みすぎずメインメッセージに絞ることは意識して練習していたので、その点は何とか形にできたのではないかと思います。

質疑応答では、ほかの診療科の先生方からも意見をいただき、「自分たちの取り組みをどう理解してもらえるのか」「どこが伝わりにくいのか」を客観的に知ることができました。プレゼンテーションや英語力の課題がはっきり見えたという意味で、非常に勉強になりました。

—— 他の発表者から学んだこと

成人領域の内科・外科・救急など、急性期疾患を扱う演題は、画像やデータも迫力があり、純粋に「すごいな」



PROFILE

出身地：宮城県
出身大学：島根大学(2021年卒)
宝物：奥さんとの写真
座右の銘：特になし



と感じる発表が多くありました。一方で、自分の発表は、派手さはなくとも、開業医の先生やコメディカル、他科の先生方と一緒に「地域としてどう小児脳腫瘍に向き合うか」を考える内容でした。

数やインパクトのある図がなくても、現場で積み重ねてきた取り組みを丁寧に言語化することには意味がある、という手応えも得られました。

—— 医師として大切にしていることと、これから

臨床の現場では、忙しさや焦りから、つい言葉がきつくなってしまうことがあります。それが相手にどう伝わるかを考えると、あとから反省する場面も少なくありません。「とにかく謙虚に、誠実に」ということを、自分の中での軸として持ち続けたいと思っています。

今回のフォーラムを通じて得た経験を、今後は論文執筆や次の学会発表にもつなげていきたいです。英語での発表や、さまざまな分野の先生方との交流を重ねながら、小児科医としても、一人の医師としても成長していければと思っています。

若手医師フォーラムへの応募は、指導医の先生からのお声がけがなければ、きっと自分からは踏み出せなかったチャレンジです。同じように迷っている方がいれば、「とりあえずやってみる」くらいの気持ちで一歩を踏み出してみたいです。準備は大変ですが、終わってみると必ず、自分の糧になっていると感じられると思います。

NHO TALK SESSION



竹内 志織

大学時代からヴィオラを演奏し、現在も医師会オーケストラで活動中。

安田 あゆ子

3人の息子の子育て終了宣言を控えるベテラン。米国留学や厚労省出向も経験。

小暮 あゆみ

2児の母。レジデント中断や専業主婦期間を経て、非常勤から常勤へ復帰。

曾我 舞

趣味はドライブと旅行で、一人旅も楽しむ行動派。



特集 スペシャル企画

NHO女性医師の本音座談会

結婚・妊娠・出産、育児と当直、評価や昇進——。世代や診療科が違えば“現実の壁”も違う。

だからこそ、個人の頑張り論ではなく、仕組みと運用で解いていく視点が要る。今回は名古屋医療センターから、研修医、子育て中、そして子育てを卒業する女性医師が集結。専門選択の葛藤や“浦島太郎状態”からの復帰、失敗の乗り越え方まで、NHOの現場で働く彼女たちがキャリアと人生の「本音」を語り合う。

「24時間働けますか？」時代を超えて 先駆者たちが切り拓いた、道なき道

——まずは先輩方のキャリアの歩みから伺います。安田先生は医師として30年、第一線で活躍されていますが、当時の環境はいかがでしたか？

安田…今でこそ女性外科医は増えていますが、私が医師になった約30年前は、女性が外科系に進むこと自体が珍しい時代でした。私が大学の胸部外科に入局した時も、女性の入局者は初めてでした。医局はまるで体育会系のような男性社会の雰囲気でした(笑)。当時は「24時間働けない医師は一人前ではない」という風潮も根強く、チーム医療の体制も今ほど整っていませんでした。

小暮…今の研修医の先生たちには想像がつかない世界かもしれませんね。

安田…そうですね。私は夫と共に米国へ留学し、帰国後は幼い子供2人を抱え

て大学病院で勤務していましたが、夜中までの手術や呼び出しに対応するのは物理的に限界がありました。そんな時、当時の教授から「当直のない仕事があるから」と勧められたのが厚生労働省への出向でした。行政の仕事をしつつ、週に2日だけここ名古屋医療センターで手術をさせてもらうことになったのが、当院との関わりの始まりです。——小暮先生は、一度キャリアを完全に中断された期間があるそうですね。

小暮…はい。私は血液内科のレジデント3年目の時に妊娠しました。本来なら最後まで研修を全うしたかったのですが、出産のため半年を残して退職し、一度「リタイア」という形を取りました。その後、夫の転勤で名古屋に来ることになり、実家も近くなるので「この際、今のうちに2人目も」と計画して、年子で出産しました。結果として、2年半ほど医療現場から離れ、専業主婦として過ごしました。

安田…その「一度休む」という決断も勇気がいりますよね。

小暮…そうですね。でも、子供が少し大きくなったタイミングで、当院には院内保育所があることを知り、復帰を決めました。最初は非常勤として週2日、



外来の手伝いからスタートしました。病棟で主治医を持つと、どうしても急変時や時間外の対応が必要になり、子育てとの両立が難しくなります。中途半端になるのが嫌だったので、「私は外来専門で」と割り切らせてもらい、15時半までの時短勤務で働いていました。曾我…完全に辞めてしまってから復帰することへの不安はなかったですか？小暮…不安だらけでしたよ(笑)。たった2年半のブランクでも、現場に戻ると新しい薬が出ていて名前もわからない。まさに「浦島太郎」状態でした。それでも、外来診療なら問診や基本的な検査から始められるので、上司につつ確認しながら、徐々に勤を取り戻していきました。

「キャリアの正解」は見えないけれど
計画通りにいかないからこそ、柔軟に
——研修医のお二人は、先輩方のお話

を聞いてご自身の将来をどうイメージしていますか？

竹内…私は小児血液の医師になりたいと考えています。ただ、この分野はアカデミックな活動も重要で、大学院へ進む先輩も多いです。将来は子育てをしたいと思っているのですが、専門医取得、大学院、出産・育児というイベントがある中で、どのタイミングが育児をする時なのかイメージがまだはっきりとなく……。先輩方はどうやってライフプランを立てていたのでしょうか。

小暮…正直に言うと、私はあまり計画的ではなかったです(笑)。ただ、血液内科の専門医を取るには、やはり病棟での症例経験が必須になります。私の場合、一度リタイアして外来のみの勤務になったため、実は血液内科の専門医は持っていません。もしキャリアを最優先するなら、親御さんの協力などを得て、専門医を取るところまでは一気に走り抜けるというのも一つの手かもしれません。

安田…私は逆に、ライフイベントに合わせて資格を取ってきました。1人目の出産時に外科認定医、2人目の出産時に博士号の論文、3人目の時に呼吸器外科専門医試験を受けるといった具合です。



産休や育休、あるいは留学中など、臨床から少し離れる時間を「勉強の時間」と捉えて、その時期にできるステップアップを組み込んでいました。

竹内…ライフイベントをキャリアの障害ではなく、勉強の機会に変えていたんですね。すごいです。

安田…あとで振り返ればそう言えますけど、当時は必死でしたよ(笑)。でも、計画通りにいかないのが人生です。私は米国留学中、2年ほど専業主婦をしていた時期があるのですが、それが精神的にとっても辛かったですね。「誰からも、社会からも必要とされていない」という孤独感がありました。その時の辛い経験があるからこそ、どんなに忙しくても仕事があるありがたみを感じますし、「医師として働いていたい」という気持ちが今の原動力になっているかもしれません。

曾我…私はまだ志望科も迷っていて、結婚や出産のことも現実味がありません。まずは仕事ができるようになりたいという気持ちが強いのですが、同期と比べて「自分はこれできていない」と落ち込むことが多くて……。家に帰ってからも一人反省会をして、自分を責めてしまうことがあります。

安田…それは医療安全の責任者として言わせてもらうと、とても健全な反応ですよ。反省しない人の方がよっぽど怖い(笑)。落ち込むということは、自分の行動を振り返り、リスク管理ができている証拠です。その悔しさをノートに書き留めて、次に活かせばいいんです。

失敗も劣等感も、「私だけの強み」に誰かの代わりではなく自分だけの価値を

——日々の業務の中で、自信を失いそうになった時や、逆にやりがいを感じたエピソードはありますか？

竹内…私は救急外来があまり得意ではなく、テキパキ動ける同期を見ては劣等感を感じていました。でも先日、精神的な問題を抱え、オーバードーズで搬送されてきた患者さんを担当した時のことです。最初は何も話してくれなかったのですが、時間をかけてお話を聞くうちに、ご家族にも言えなかった苦しみを打ち明けてくださいました。私が間に入ってご家族の思いを伝え、と、「家族も心配してくれていたんだ」と理解してくれて、関係修復のきっかけを



作ることができました。

小暮…それは素晴らしいですね。

竹内…看護師さんからも「竹内先生だからできたことだね」と言っていたけれど、救急の現場に苦手意識があったけれど、私にも役に立てることがあるんだと、少しだけ自信が持てました。

小暮…その感覚はすごく大事だと思います。私も専門医を持っていないことに引け目を感じることがありました。でも、上司から「HIV診療をやってみないか」と声をかけてもらい、メインに診るようになってからは、「これなら誰にも負けない」という自分の居場所ができました。「小暮先生にお願いしたい」と患者さんやスタッフから頼りにされることが、医師としての大きな自信とやりがいにつながっています。

曾我…私も患者さんに「ありがとう」と言われたり、名前を覚えてもらえるだけで本当に嬉しくて、それが一番のモチベーションになっています。

安田…医師の仕事は手術や手技だけではなく、患者さんの心に寄り添うことも立派な医療です。自分なりの「強み」や「得意分野」を見つけて、それを磨いていけばいいと思いますよ。

制度と運用、そして「お互い様」の文化 NHOで描く持続可能なキャリア

——NHOの環境について、働きやすさや課題など率直な意見ををお願いします。

安田…名古屋医療センターは、かなり早い段階から女性医師支援の体制が整っていたように思います。院内保育所もはやくから女性医師に開放されていましたし、時短や私のような非常勤の柔軟な働き方を認めてくれました。これは大規模病院ならではの「バッファ（ゆとり）」があるからこそ可能なことだと思います。

小暮…私は東京医療センターから名古屋へ移りましたが、NHO内での異動という形だったので、キャリアが完全に途切れる不安が少なかったです。全国に140の病院があるNHOのスケールメリットは、配偶者の転勤などがある医師にとって大きな魅力だと思います。キャリアを継続することで退職金などの生涯収入も守られますね。

——子育てとの両立において、改善してほしい点はあるですか？

竹内…保育園の呼び出しやお迎えが、ど

うしても「母親」に偏っているのが気になります。ある女性医師の先輩ご夫婦の話なのですが、父親が医療職ではなく比較的融通が利くにもかかわらず、母親の方に毎回呼び出しが来てしまうそうです。本来なら対応できる方に連絡すべきなのに、それで夫婦仲までギクシャクしてしまうのはやるせないですね。社会通念として「まずはお母さん」となっている部分がまだあるなと感じます。

安田…今は男性医師も育休を取る時代ですからそれは変えていかないといけませんね。うちの外科でも男性医師が育休を取得していますし、「子育ては女性の仕事」という考え方は変わりつつあると思います。夫婦で協力し、そして職場全体で支え合う意識が必要です。

小暮…私は実家が遠方で、日常的なサポートは期待できませんでした。子供が熱を出した時は、上司に電話して代診をお願いするしかありませんでしたが、嫌な顔一つせず「いいよ、行ってあげて」と言ってもらえたことには本当に感謝しています。だからこそ今、若い先生やお子さんがいる先生が困っている時は、「全然いいよ、私がやっておくから」と快く引き受けるようにしています。

安田…その「お互い様」の精神が大切ですよ。今は助けてもらう側でも、いつか自分が誰かを助ける側になる。その循環があれば、誰もが長く働き続けられる職場になるはずです。

——最後に、次世代の医師たちへメッセージをお願いします。

曾我…今日のお話を聞いて、将来への不安が少し軽くなりました。まだ専門も決まっていませんが、自分のペースで、その時々「いい選択」を積み重ねていけばいいんだと思えました。

竹内…先輩方が制度をうまく使いながら、それぞれの形でキャリアを築かれている姿に勇気をもらいました。私も「自分らしさ」を大切にしながら、小児血液の医師を目指して頑張ります。

小暮…私のように一度休んでも、また戻ってこられる場所があります。NHOには多様な働き方を受け入れる土壌があるので、完璧を目指さず、細く長くでもいいので医師としてのキャリアを続けてほしいですね。

安田…今はもう「女性医師だから」と特別視する時代ではありません。性別に関わらず、一人ひとりがプロフェッショナルとして尊重され、ライフイベントに合わせて柔軟に働ける。そんな当たり前の社会を、NHOから作っていかたいですね。ぜひ次は、男性医師の「本音座談会」も企画してください。彼らが子育てやキャリアをどう考えているのか、ぜひ聞いてみたいです(笑)。

女性医師本音座談会を終えて

名古屋医療センター
呼吸器外科
医療安全管理室
安田 あゆ子



出身地：愛知県名古屋市
出身大学：名古屋大学(1996年卒)
宝物：3人の子供、出会い、経験
座右の銘：迷ったら進め！

時代は変わりました。これからは性別に関わらず、一人ひとりが自分らしいキャリアを描ける時代です。目の前の仕事に誠実に向き合い、良い医師人生を歩んでください。

名古屋医療センター
血液内科・感染症内科
小暮 あゆみ



出身地：岐阜県養老町
出身大学：三重大学(2001年卒)
宝物：子供からプレゼントされた携帯ストラップ
座右の銘：強くなければ生きていけない。優しくなければ生きていく資格はない。

若い先生方の悩みを聞き、私自身も初心を思い出しました。NHOには多様な働き方を許容する土壌があります。長く働き続けられる環境を共に作っていきましょう。

名古屋医療センター
臨床研修医 1 年目
曾我 舞



出身地：愛知県
出身大学：金沢医科大学(2025年卒)
宝物：今までの思い出
座右の銘：なんとかなる

落ち込むことも含めて成長の過程だと背中を押していただきました。ライフイベントと仕事の両立について、制度や周囲の支えがあることを知り、前向きな気持ちになりました。

名古屋医療センター
臨床研修医 1 年目
竹内 志織



出身地：愛知県
出身大学：福井大学(2024年卒)
宝物：大学1年生から弾いているヴィオラ
座右の銘：やらない後悔よりやって後悔

先輩方の具体的な経験談を伺い、将来への漠然とした不安が和らぎました。「自分だからできること」を大切に、焦らずキャリアを積んでいきたいです。



令和7年度 良質な医師を育てる研修 脳卒中関連疾患診療能力パワーアップセミナー



「座学はなし」への転換。

現場で生きる“判断”と“連携”を学ぶ

一刻を争う脳卒中診療において、若手医師に真に求められる「現場の動き」とは何か。NHOでは各領域のトップレベルの施設が担当し、実践的なスキルを磨く研修を開催しています。今回は仙台医療センターで開催された「脳卒中関連疾患診療能力パワーアップセミナー」を特集。10年以上の歴史の中で進化を続け、現在は座学から完全実践型へと変貌を遂げた本研修について、講師であり企画の中心を担う江面正幸先生（仙台医療センター院長）にお話を伺いました。

眠っている参加者を見て決意した 「研修革命」——

NHOには、診療科や疾患単位で構成された十数種類の「良質な医師を育てる研修」があり、それぞれの領域を得意とする施設が企画を担当しています。私が院長を務める仙台医療センターでは、脳卒中分野の担当施設として、もう10年以上前からこのセミナーを実施してきました。しかし、開始当初のスタイルは現在とは全く異なるものでした。当時は講義中心の座学形式だったのですが、ある時、せっかく全国から集まってくれた参加者が講義中に居眠りしている姿を目にし、強烈な危機感を抱いたのです。わざわざ遠方の仙台まで足を運んでもらっているのに、ただ座って話を聞くだけでは、ここに来る意義



がありません。

「これではいけない、面白くない」と痛感し、そこから研修内容の大幅な改革に乗り出しました。まずは血管内治療のライブ見学を取り入れ、実際の手技を見られるようにし、講義の時間を減らしてグループワークを増やしていきました。そして4～5年前、ついに講義を一切廃止し、ライブ見学、ハンズオン、グループワークだけの「完全実践型ス



タイトル」へと完全に移行しました。

コロナ禍においては、「現地で体験することに意味がある」という信念から、あえてオンライン開催は行わず中断していましたが、昨年からようやく復活し、今年はコロナ後2回目の開催を迎えることができました。

「時間との勝負」を制するための 「バトンパス」——

本研修で最も伝えたいことは、脳卒中診療は「時間との勝負」であるという点です。例えばt-PA治療（血栓溶解療法）は発症から4.5時間以内という厳しい時間制限があります。

研修医の皆さんにこのセミナーで習得してほしいのは、難しい手術の手技そのものではありません。重要なのは

「自分で治療を完結させる能力」ではなく、「適切な専門家に、最短時間で引き継ぐ判断力」です。

専門医が到着した際、すぐに治療を開始するためには事前の準備が不可欠です。採血結果は揃っているか、ルートは確保されているか、家族への説明は済んでいるか。専門医が判断するために必要な材料（エビデンス）を、いかに早く揃えておけるか。そして、時間がかかる処置をいかに先に済ませておくか。

自分が治療できなくても、「何が必要か」を知り、専門医へ最高の状態でバトンを渡すための準備を整えること。これこそが、脳卒中救急における若手医師の最大の役割であり、本研修で養ってほしい「スキル」なのです。

若手の熱量と全国規模の ネットワーク——

今年の参加者の傾向として特徴的だったのは、参加者の年齢層が若年化し、そのほとんどが卒後1～2年目の研修医だったことです。かつては5～10年目の医師も参加していましたが、今年は学年が近かったこともあり、研修中のグループワークやディスカッション也非常に活発でした。

その熱気は研修時間外にも現れており、開催された懇親会には、なんと参加者の大部分が出席してくれました。コロナ前は参加率が半分程度だったことを考えると、驚くべき変化です。体を動かしながらの研修がアイスブレイクとなり、初対面の医師同士でも自然と距離が縮まったのでしょうか。

NHOは全国140病院という巨大なネットワークです。このスケールメリットを活かし、各領域のトップレベルの医師や施設から「いいとこ取り」ができるのが、NHOの研修制度の最大の魅力です。

今回の研修で得た知識と、全国の同期とのつながりを糧に、それぞれの病院で診断能力を向上させ、患者さんを救うための「最速の初期対応」を実践してくれることを期待しています。

講師

仙台医療センター
院長

江面 正幸

PROFILE

出身地：茨城県
出身大学：東北大学（1986年卒）
宝 物：子供・ベガルタ仙台
座右の銘：信じたこの道を
どこまでも

研修医へオススメの本

信じた道に花は咲く
https://www.m-book.co.jp/
product/2485



研修医時代



VOICE × 受講者

知りたかった後医の思考。専門医の“時間感覚”を肌で学びました！

三重中央医療センター 臨床研修医 1年目 久野 潤一

将来は救急医を目指しており、救急外来で脳卒中患者を診る際、後医となる脳神経外科医が何を考え、何を求めているのかを知りたくて参加しました。

研修を通じて、急性期脳梗塞における「時間感覚」が、専門医と自分とは全く異なることを痛感しました。ただ急ぐのではなく、次の工程へスムーズに引き継ぐための準備や時間管理がいかに重要か、その「バトンパス」の重みを理解できたことが最大の収穫です。

今回は三重県から一人での参加でしたが、学んだ内容は自院の研修医18人全員に共有する予定です。週1回の勉強会で知識を還元し、誰が当直に入っても高いレベルで対応できるよう、病院全体の脳卒中診療の底上げに貢献したいと考えています。



PROFILE

出身地：三重県
出身大学：三重大学
（2025年卒）
宝 物：自分に関わる人達
座右の銘：才能の差はない、
熱量の差

神経難病、神経・筋疾患の診療について



医療の「時間軸」に寄り添い、
難病とともに歩む人生を支える

国立病院機構 東 埼 玉 病 院

院長 尾方 克久

神経難病診療の最前線で 果たすミッションと病院の強み

東埼玉病院は、神経難病や神経・筋疾患を抱え、病気の進行とともに人生を歩んでいかれる方々を、長きにわたり支え続けてきた専門医療機関です。

当院が掲げるミッションは、患者さんを「治すこと」と「癒すこと」を両輪として提供することです。急な対応を要する救急医療よりも、患者さん一人ひとりに深く寄り添い、生活の中にある病気や障害をサポートし、治しながら、癒しながら支えることに当院の強みがあります。

難病の患者さんが病気全体の経過の中で今自分がどのぐらいの位置にいて、今何をすべきか、次に何が起こりそうなのかということをゆっくりお話する時間は、一般の救急病院ではなかなか作れないことが多く、そのチャンスをつくって患者さんやご家族にお話しをするのが、我々の役割だと思っています。

入院患者さんの構成を見ても、ALSや筋ジストロフィーなどの「痩せる病気」が約3割を占めるほか、パーキンソン関連の「震える病気」、脊髄小脳変性症などの「ふらつく病気」がそれぞれ約2割。免疫性神経疾患なども含め、約9割が難病の患者さんであり、慢性進行性の神

経疾患を幅広く診ています。

地域・大学との多層連携と 在宅志向への対応

当院の診療は、大学病院からのご紹介を受け、その後の慢性期・進行期の診療を担う連携体制が確立されています。さらに、近隣のクリニックや病院との連携も重要です。当院で正確な診断を行った後、普段の診療は地域のかかりつけ医に委ね、当院では年に数回、神経内科学的な診察を行い、病状の進展に応じた治療調整や生活指導、治療方針の決定を行います。特にコロナ禍以降の近年は、「入院はできるだけたくない」という在宅志向が加速度的に強まっており、地域での生活を支えるサポート体制の構築が喫緊の課題となっています。

病気に「時間軸」への意識と 医師のアイデンティティを築く

当院では、内科系の初期・専門研修を他施設との連携プログラムとして実施しています。若手医師には、特に二つのことを強く期待しています。

1. 病気に「時間軸」があることを意識せよ

病気は、個人の一生にわたって変化していくものです。パーキンソン病一つとっても、電車で都心へ通える方もいれば、完全に寝たきりの方もいます。時期によって患者さんにできること、できないこと、最も困っていることは異なります。

病気は患者さんの人生に沿って変化していくものだということを意識した上で患者さんを診察して欲しいです。急性期から回復期、在宅サポートまで、病気の全経過に沿って対応できるNHOの一員であるからこそ、病気の時間軸を意識した研修は、若手医師にとってかけがえのない経験となります。

2. 「医師のアイデンティティ」を確立せよ

日々進化する医学において、知識や技術は変わる可能性があります。しかし、医師としての核となる「アイデンティティ」は一生ものです。

そもそも自分はなぜ医学部に入って医師になったのか、医師免許を持って自分は患者さんやご家族や勤め先や日本の医療に何が出来るのか、何をするために自分が医師になったのか、それを考えて欲しいです。

当院は「学ぶ病院」のスローガンを継承し、様々な職種や学生にとって学びの場となることを目指しています。レジデントの先生方には、周囲の上級医を「生きた教材」と捉え、良いところを積極的に取り入れて、自分にとっての唯一無二の医師像を確立してほしいと強く願っています。

公衆衛生の向上 NHOの矜持

NHOの仕事は、目の前の患者さんへの診療だけではありません。地域医療を支え、研究を推進し、広い視野で日本の公衆衛生の向上と増進に寄与することこそが、法が定めるNHOの目的であり、我々の矜持です。「公衆衛生に寄与した」経験は、今後のキャリアにおいても必ず生かされるはずです。また、NHOでは、専門医取得前後の若手医師を主な対象とした「良質な医師を育てる研修」を各領域で開催しています。これらの場を活用し、知識や実技だけでなく、講師陣の「医療に取り組む意識」に触れてほしいと思います。

ぜひ、あなたにとって医師とは何か、あなたの医師としてのアイデンティティをレジデントの間に考えていただければと思います。それを考える場として、NHOには色々な病院があり、多様な研修会もありますので、ぜひ活用して、自分の今居るところだけではなく積極的



に色んなところをみて経験を積んでいただければと思っています。



PROFILE

出身地：熊本県
出身大学：東京大学
(1993年卒)
宝 物：恩師と仲間
座右の銘：肝心なことは目に見えない
(「星の王子さま」より)

研修医へオススメの本

理科系のための英文作法

中公新書1216
杉原 厚吉(著)



国立病院機構 東 埼 玉 病 院

住所 〒349-0196
埼玉県蓮田市黒浜 4147
WEB <https://higashisaitama.hosp.go.jp>

病床数 **532** 床 診療科数 **17** 科

東埼玉病院のある街



埼玉県東部に位置する蓮田市は、大宮台地の豊かな地形と水辺の景観が息づく街です。市域の中心部を流れる元荒川、西端の市境を流れる綾瀬川といった大小の河川のほか、多くの沼や池が点在し、水辺の潤いに満ちた穏やかな風景が広がります。落ち着いた暮らしやすさと、水と緑に囲まれた自然の風景に魅力が調和した地域です。

初期研修プログラムの紹介

国立病院機構 岡山医療センター



総合力と専門性

臨床研修のすべてがここにある！

岡山医療センター 診療部長(小児科) 清水 順也

岡山医療センターの初期臨床研修について——

当院は、岡山県の急性期医療を支える中核病院として、地域医療支援病院などの各種指定を受け、救急から専門領域まで幅広い診療機能を備えています。33科にわたる充実した診療科を擁し、多様な症例に出会えることが最大の魅力です。

「総合力と専門性、臨床研修のすべてがここにある！」を体現する、理想的な研修の土台が整っています。

プログラムの特徴について——

当院の初期研修は、特定コースを設けない単一コース制を採用。入職後の志望変更にも柔軟に対応し、研修医が自身の将来像に合わせて計画を組み替えやすいのが特色です。必修科目に加え自由選択9カ月を確保し、研修医の主體的な学びを支援します。

ブロック研修は1カ月単位としていますが、さらに、放射線科や臨床検査科などの必須以外の診療科も2週間単位のミニローテ(短期研修)として設定可

能で、幅広く様々な分野に触れる機会を提供します。進路検討の早期化に対応し、希望に応じて1年目から自由選択を入れる運用も可能です。

1年目の総合診療・救急(2カ月)の期間で集中的な外来研修を設定しており、2年目の地域研修に進む前に「外来の基本姿勢」を学ぶことを狙いとし、研修医個々の到達度に応じて開始時期を調整します。

内科では二科並行ローテも希望により選択可能で、これにより、患者の経過を長く診る視点を養います。年間計画は原則固定ですが、前向きな学習理由があれば手続きを経て変更も検討可能です。

教育面での目玉は、毎年秋から冬に開催する院内発表会です。1年目・2年目の全員が症例報告を行い、指導医が責任を持って発表から論文化までを指導します。中には全国学会での発表や、英文誌を含む質の高い医学雑誌へ投稿する研修医もいます。また、研修医主体のプライマリ・ケア勉強会や各診療科でのセミナー、BLS/ICLS受講に加え、NHO主催の「良質な医師を育てる研修」への参加も推奨しています。なお、学会発表や研修参加の出張費等費用については、上限内で病院からのサポートがあります。

働き方については、当直明けは休みとし、研修と休養のバランスを確保しています。時間管理の徹底を前提としつつ、申し送りや引き継ぎを通して患者責任を全うすることを学びます。

読者へのメッセージ——

当院が最も大切にするのは自主性です。指導側の働きかけは惜しみませんが、「自ら学び取りに行く」姿勢こそが、将来の成長に大きな差を生みます。一見遠回りでも将来必ず生きる、いわば「無用の用」を大切にしながら、全科で「基礎力」を鍛えてほしいと考えています。

私たちが目指す医師像は、「目の前で困っている人を、確実に助け、地域に信頼される医師」です。

進路選択においては、施設の評判やハード面だけでなく、「自分がここで成長したい」と納得できる場を自分の意思で選ぶことが重要です。見学やイベントを通じて十分に情報を集め、自己決定で研修をスタートさせる、その覚悟と熱意を当院は全力で支えます。



PROFILE

出身地：愛媛県
出身大学：岡山大学(1995年卒)
宝物：両親から授かった自分自身
座右の銘：なんとかする、なんとかなる



国立病院機構

岡山医療センター

住所 〒701-1192 岡山市北区田益 1711-1

WEB <https://okayama.hosp.go.jp>

病床数 **609** 床 診療科数 **33** 科

岡山医療センターの特徴

岡山医療センターは、高度急性期総合病院として地域中核を担う。地域がん診療連携拠点病院、地域災害拠点病院、地域医療支援病院の指定を受ける。高度で専門的な先進医療を総合的に提供し、DPC実施の急性期病院として脳・循環器領域で先進的役割を担う。総合周産期母子医療センターとして成育医療を担い、小児から成人まで切れ目のない診療体制を整備。卒後臨床研修病院として研修医教育にも力を入れ、地域医師会の生涯教育にも積極的に協力している。各診療科が高い専門性を保ちながら密に連携し、あらゆる疾患にワンチームで臨み総合力を発揮するのが強みであり、多様な経験が積める研修環境が整っている。

VOICE × 臨床研修医

挑戦を後押ししてくれる環境です！

臨床研修医 1年目 岡本 萌桃

救急外来で担当した患者さんを、その後、総合診療科のローテーションで入院から回復まで継続してフォローできる点は、臨床の学びとして非常に大きいです。一連の流れを自分の目で追い、「見っぱなし」にならずに患者さんの元気な姿を見届けられるのは、医師としての喜びです。今後は、当院の活発な学術活動を活かし、院外発表などにも積極的に挑戦したいと考えています。「謙虚さと向上心」を忘れず、目の前の患者さんに確かな手を差し伸べられる医師を目指していきます。

PROFILE

出身地：岡山県
出身大学：香川大学(2025年卒)
宝物：家族
座右の銘：誠心誠意



将来のロールモデルが見つかります！

臨床研修医 2年目 大月 貴弘

各診療科の充実度に加え、医局がオープンな雰囲気、ローテート後も先生方と繋がりを保ち、気軽に相談できるのは当院の大きな魅力です。先生方が臨床だけでなく研究や学会発表にも熱心なため、ロールモデルを見つけやすいのも当院ならではの環境です。私自身も影響を受け臨床研究に興味を持つようになりました。疑問をうやむやにせず、すぐに論文などで調べる先生方の姿勢は、日々の診療に大きな影響を与えています。将来の目標を見つけるための材料が当院には揃っています。

PROFILE

出身地：岡山県
出身大学：鳥取大学(2024年卒)
宝物：人との出会い
座右の銘：やらずに後悔するより やって後悔したい



BACK NUMBER × バックナンバー
過去の「NHO NEW WAVE」が
WEBサイトから閲覧できます！

https://nho.hosp.go.jp/education/education_nho.html

NHO ニューウェーブ

検索



NHO 本部公式 SNS アカウント

本部のSNSで発信したい情報があれば広報係までご相談ください！

facebook

✕



NHO NEW WAVE

読者アンケート実施中！

◀左記二次元コードよりご協力ください